

次の文章を読んで、後の問い(問1～11)に答えよ。(解答番号 19 ～ 33)

囲い込み装置としての「学校」

二十世紀は、子ども専用の「囲い地」の量産された時代でもあった。その典型例のひとつは、(…略…)子どもだけを囲い込んで特別の生活を用意した義務教育用の学校である。「教育」という営みを、基本的には、その人に与えられた天与^アの資質を最大限に発現させ、同時に、社会への適応準備として要求される知識・能力・態度を獲得させるものであるとすれば、それは、「学校」という制度にのみ依存する必然性^イはないはずである。しかし、二十世紀のわが国は、その大半を「学校」というシステム内の営みと特定し、念入りに制度化してその強力化を企ててきた。

近代の学校制度は、産業社会における効率主義の産物と言われる。伝統的社会では、大人と共有される生活を通じて無意識的に伝達されていた成人後の生活にかかわる知識・能力・技術、あるいは態度が、「学校」という装置を通じて意図的・効率的に育成されるようになったのである。

先進国と呼ばれる国々において、近代化とともに学校制度が急激な発達を見せたのは、工業化社会への転換に起因するとされる。すなわち、それら社会が、一定の知的ス^ウイジユンの労働者を大量に要請したこと、印刷技術の進歩とともに文字がメディアの中心となり、大衆層の識字能力が必要とされたこと、などの諸要因によって、均質の知識保持者群を効果的に生み出すべく、「学校装置」が不可避とされたのである。

学校教育を支えた強力な支柱の一本が、「科学主義」に基づく「児童研究」であり、他の一方が、近代化達成を急いだ「国策」であったことは言うまでもない。とくにわが国の場合、近代学校の成立期においては、このふたつは、エのように機能して、目的遂行^オを容易ならしめたのであった。

結果として、子どもたちは「学校に通うべき者」と範疇^{はんちゆう}化され、「子ども＝学校の生徒」という図式が成立する。私たちの社会は、いつか無自覚裏に、子どもの存在価値を学校教育への適応度によって判定することさえし始めたのである。結果として、子どもたちにとっては、それ以外

の生き方が許されないほどの徹底ぶりであった。私たちは、初対面の子どもに対して、「何年生？」と問うことに対して、格別の疑念も抱くことをしない。わが国の近代は、見事なまでの「学校化社会」を形成し、子どもたちはその中に囲い込まれて他の生き方を許されなくなった。それはまさしく、「教育＝善であり価値である」という信念のもとに形成された「善意のゲッター（*）」に譬えられるかも知れない。子どもたちは、その中に「収容」されたのである。

しかし、こうして「学校」という装置が子どもの成長に関する特権を享受しつづけた結果、かつての子どもたちが、学校以外の場で獲得してきた自ずからなる「成長力」と、家庭や地域社会の中で大人たちが無意図的に行使してきた「育児力」は急速に衰退してその影を薄くしていった。

「すべての子どものうえに、よい教育を」というスローガンが掲げられるとき、人々は無意識裏に「理想の学校」「理想の教師」の出現を期待して、視線を「学校教育」に向ける。また、子どもたちのうえに何か望ましくならぬ事件が発生するとき、「学校」は必ずといってよいほどに非難攻撃する視線に曝されよう。こうした「学校信仰」は、現代人の意識下に入り込んで、彼らの行動を支配してしまったのだ。

このことが物語るのは、学校外の生活の中で、遊び戯れつつ身につけていた自ずからなる成長力や、親や近隣の大人たちが無自覚裏に駆使していた育児力に対しての不信感にほかならない。つまるところ、「学校」は、子どもたちを彼ら自身の生活、あるいは親や隣人との暮らしから連れ出し、囲いの中に収容して設定された目標を目指させ、人為的・計画的な教育を施す、よく仕組まれた人工の装置なのである。

そして、子どもを早々と手放して身軽になることを求める若い親たち、さらに、身近に生活する子どもの存在を厭わしく感じる地域住民たちの、「子ども忌避」の感覚を醸成する装置としても機能したのではなかったか。なぜなら、彼らにとって、子どもとは、ともに生活する仲間ではなく、どこかに「囲い込んでおくべき存在」にほかならないのだから。

「子ども文化」という囲い込み装置とその崩壊

印刷文化の発達は、言説を囲んで「**B**」と「**C**」という直接的な関係にあった両者を分離し、「書物の作り手」と「書物の読み手」という間接的関係に組み替えてしまった。加えて、「文学芸術」の成立にともない、両者は、自己表現する「作者」と自覚的な「読者」の関係を取り結ぶことを要請される（前田愛 一九七三）。近代文学が「読者」を誕生させたと、言われるのはこのゆえンである。

「児童文学」の場合も、例外ではない。十九世紀以降、発達の度を加えた印刷文化は、情報伝達メディアに加えて、文字文化を教養やゴラクの

ための「本」というかたちで広く大衆の間に送り込んだ。そして、本を作るための「企画」や「編集」が専門性を確立し、作られた本は大量消費の対象として市場を流通するようになった。二十世紀は、ジャーナリズムを勃興させた時代であり、市場原理に支配者の地位をゆだねた時代でもある。したがって、こうした土壌のうえに、「児童文学」というジャンルが誕生し、「児童書」という商品が出現して、子ども専用の囲い地として機能し始めたのであった。

「児童文学書」は、文字を表現の主要素としている。そのために、「文字学習」の先達^ケであり、また、書籍を購入する際の資金の提供者である親や教師たちが、子ども読者より以前に書物と出会う機会を獲得してしまう。結果として、購入の可否を決定する役割は、しばしば、当事者である子どもにまして、親や教師たちにゆだねられた。まず本を手に取り、ページを捲^{めく}るのは親や教師たち。子どもの前に置かれるのは、彼らが「良書」と判定した作品群ということになる。ここでも、子どもたちは、「囲い地のなかの囚人」と化した（本田和子二〇〇〇）。

「児童文学」は、なぜか「子ども文化」の代表として語られることが多い。近代的な子ども文化の領域で、もともとよく発達し、典型的に時代思潮を反映して見せたのが、この領域だったからであろうか。このことは、また、近代社会が印刷文化に支えられ、情報の主流に活字メディアが位置してその流れをリードしたことの象徴でもある。言うまでもないことながら、「子ども世界」といえども、情報社会の動向と不可分に結びついて動くのである。

そして、この代表的児童文化領域が、情報世界の変動によって崩壊させられ、子ども世界の急速な変貌を促しつつあるとは、考えてみれば、皮肉かつ興味深い出来事と言いうる。たとえば、テレビ、パソコン、あるいは携帯電話など、次々と子ども世界に登場する電子機器によって、大人の手で周到に用意された「子ども文化」という専用囲い地は壊滅の危機に立たされているのではないか。子どもたちは、電子機器という新しい道具を手にし、自らの手で諸種の情報を入手して、大人との間に設けられた情報の垣根^{やすやす}を易々と乗り越えようとしている。テレビは、その前に座ってチャンネルを回す子どもらに対して、大人と何ら異ならない各種情報を提供して見せる。パソコンに至っては、操作を覚えた子どもたちの前に、大人の関与しない情報世界をも提示してしまうのである。かつて、文字文化の熟練度において子どもより先に情報を入手し、伝達者としての役割を担っていた大人は、いまやその地位を奪われ始めた。^E両者の隔たりは、急速に無化されていくと言えよう。

情報の跳梁^{ちようりょう}、とくに電子機器に媒介されるそれは、たんに書物文化を駆逐^{くちく}して子ども世界の変貌を促しただけではない。「玩具」「文房具」あるいは、「嗜好品^{しこうひん}」に至るまで、子どもの暮らしにかかわるあらゆるものたちが情報にリードされ、テレビや携帯電話経由の情報によって支配され

ていると言いえよう(本田和子 一九九九)。

そして、これら電子機器の跳梁に際して、「消費者としての子ども」が果たした役割の大きさを見落としてはなるまい。彼らは、新機種の発売に目を輝かせ、競ってそれを手にしようと欲したのである。消費者としての子どもは、資本主義社会の進行とともに生じた都市型消費社会の落とし子であり、かつ、市場社会が二十世紀的対象として焦点化した格好の標的であった。印刷文化に裏打ちされて子どもを囲い込んだ「児童文学」が、新興期の市場社会の産物であったのと等しく、電子メディアによるその囲いの崩壊を後押ししたのも、コをつづけた市場社会であつたとは、その皮肉をかこつべきか、あるいは自明と納得すべきなのだろうか。

(本田和子「子どもの世界」による。出題にあたり、一部を省略した。)

* ゲットー……強制収容所。狭義では、第二次大戦中、ナチス・ドイツが設けたユダヤ人強制収容所の名称。

問一 傍線部ア、ケの本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は19。

20。

ア 天与の

19

- ① 生きている間だけの
- ② 非常にすぐれた
- ③ 生まれつき備わっている
- ④ 守るべき権利としての

ケ 先達

20

- ① 取引や交渉の相手
- ② 案内者や指導者
- ③ 失敗経験の豊富な人物
- ④ 何の迷いも持たない人

問二 傍線部「必然性」とあるが、末尾に「性」を付けて熟語を作らないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 21。

- イ 必然性 ① 汎用 ② 普遍 ③ 弾力 ④ 自動

問三 傍線部「ウ、ク」に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 22 ～ 23。

ウ

スィ
ジュン

22

- ① 関係をジャスィする
② ガデンインスィの考え方
③ ジュンスィな気持ち
④ スィミン時間が足りない

ク

ゴ
ラク

23

- ① クラクを共にする
② ミヤクラクのない話
③ 高原でラクノウを営む
④ 競争からダツラクする

問四 空欄「エ、コ」を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 24 ～ 25。

エ

24

- ① 他山の石
② 高みの見物
③ 車の両輪
④ 漁夫の利

コ

25

- ① 一元化
② 肥大化
③ 可視化
④ 慢性化

問五 傍線部オ、キと同じ読み方のものを、次の各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 26 ～ 27。

オ		キ	
26 遂行		27 忌避	
① 自転車操業	② 均等に分ける	① 居住まいを正す	② プロの棋士を目指す
③ ある作家に心酔する	④ 他の追隨を許さない	③ 穩便に済ます	④ 哀悼の意を表す

問六 傍線部力「疑念」と熟語の構造が同じものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 28。

力 疑念 ① 感涙 ② 深遠 ③ 緩急 ④ 遷都

問七 傍線部A「こうした『学校信仰』とは、どのようなことを指しているか。最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- ① 学校で子どもたちに教育を施す教師は、常に子どもや親たちよりも秀でた存在であると信じて疑わないこと。
- ② 子どもたちによい教育を提供するための学校内で、望ましからぬ事件が発生するはずがないと信じて疑わないこと。
- ③ 子どもたちを預かり望ましい教育を行う学校に対し、外部から非難攻撃するような態度は許されないと信じて疑わないこと。
- ④ 学校では子どもたちのために、理想的な教師によって理想的な教育が行われるべきだと信じて疑わないこと。

問八 空欄B、Cを補うのに最も適当なものの組み合わせを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **30**。

- B―C ① 売り手―買い手 ② 語り手―聞き手 ③ 作り手―使い手 ④ 担い手―受け手

問九 傍線部D「市場原理に支配者の地位をゆだねた時代」とはどのような時代のことか。最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解

答番号は **31**。

- ① 人々の求めに応じてあらゆるものの価格が測られるようになり、経済活動こそが人々の生活や価値観を最も大きく左右するようになった時代。
- ② 人々が必要なものを自分の判断で生産することをやめ、有能な指導者のもとで計画的かつ平等に分配するシステムができあがった時代。
- ③ 領主として人々を統治してきた前近代の権力者がその地位を失い、人々が民主的に生産・流通活動を運営できるようになった時代。
- ④ 市場経済が人々を過度な競争へと駆り立てた反動から、書物や文学といった人々の精神性にかかわるものが見直されるようになった時代。

問十 傍線部E「両者の隔たりは、急速に無化されていくと言えよう」とはどのようなことを述べているか。最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

解答番号は 32。

① 「両者」は活字文化と電子機器とを指し、かつては出版された本を通して得られるのみだった情報が、電子機器を通して容易かつ大量に入手できるようになるだろうと述べている。

② 「両者」は子どもと大人とを指し、かつては子どもには子ども向けの活字メディアが与えられていたが、電子機器の登場とともに、情報の入手における子どもと大人との差がなくなっていくだろうと述べている。

③ 「両者」は従来の「子ども文化」と情報化社会になってからのそれを指し、かつては児童文学書が子ども文化の代表的な存在であったが、今後は電子機器が人気商品になるだろうと述べている。

④ 「両者」はテレビとパソコンとを指し、テレビからの情報は限られたチャンネルから提供されるものだけだが、パソコンであれば求める情報を的確に入手することができるようになるだろうと述べている。

問十一 この文章における「囲い込む」という語に関する内容にあてはまらないものを次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は 33。

① 近代では工業化社会の発展にともない、子どもたちを学校に「囲い込」んで、社会への適応に必要な知識や態度を獲得させるための教育が行われてきた。

② 近代以降の日本では、学校の中に子どもを「囲い込」むこと、すなわち子どもたちは学校に属しているべきだと考え、子どもたちを学校に通わせることが当然になっている。

③ 子どもは学校に「囲い込」まれていても、親や隣人といった周囲の大人たちから切り離されることなく、社会から知識や技術を学ぶことができる。

④ 市場社会の中で発達した印刷・出版文化は、消費者としての子どもを「囲い込」んで子ども向けの本を作ること、児童文学というジャンルを成長させた。